

命
を
か
け
て
ー

宮沢賢治×スチームパンク!

原作：宮沢賢治 演出・脚本：田中円

2013年 9月19日～9月23日
アルシェ劇場（杉並区阿佐ヶ谷）

ガスコイリの伝記

登場人物

ブドリ

ネリ

とうさん

かあさん

籠を背負った男

てぐす飼いの男

赤ひげ

白かさ

馬

となりの男

おかみさん

クーボー大博士

ペンネン老技師

一
森

ブドリ 僕の名前はブドリ、グスコブドリ。イーハトーヴの大きな森のなかに生まれた。

父親が斧を持ち出て来て、大きな木を見上げ、のこぎりを振るう。

ブドリ とうさんは、グスコブドリという木こりで、どんな大きな木でも、赤ん坊を寝かしつけるためにわけなく切ってしまう。

とうさん ここにいたら危ないぞ、ブドリ。ネリと遊んできなさい

ネリ お兄ちゃん、森の奥の方へ行きましょう。

ブドリ 僕らは毎日森で遊んだ。

ブドリ 随分遠くへ来たね。もうとうさんの木を挽く音もやっと聞こえるぐらいだ。

ブドリ そこは僕らの遊び場だった。

ネリ きいちごの実を摘んで、湧き水で洗ってつと。お兄ちゃん、ご飯だよ。（二人、きいちごの実を頬

張る。）

ブドリ すっぱ！

ネリも口に含んで、歪んだ顔をする。

ブドリ (空を向いて) ぽう、ぽう、ぽう。

ネリ (背中に手で羽を作った鳩のようなポーズで) ぽう、ぽう、ぽう。

ブドリ 聞こえる！ (ネリがブド리를好奇の目で見つめる)

あちらこちらから山鳩の、ぽう、ぽう、ぽう、ぽう、という眠たそうな声。

ブドリ 思い出す、あの眠たそうな山鳩の鳴き声。

母親登場。

かあさん かあさんは畑で麦を撒いてきますね。

むしろをしく。

ブドリ ネリ、蘭の花びらはちぎったかい。

ネリ うん。

ブドリ じゃあこのブリキ缶に全部入れておくれ。(ネリ、入れる) かまどに火をつけて。(マッチとまきなどで)

ネリ 私かきませる!(木の枝などで)

いろいろの鳥 (蘭の花を煮る) 甘い匂いに誘われた、もういろいろの鳥が

ブドリとネリ 僕らのぱさぱさした頭の上を

いろいろの鳥 (まるで挨拶するように鳴きながら) ざあざあざあ(通りすぎていく。)

#鳥は黒い釣竿を熊手のようにして、その先にカラフルなセロファンを付けて表す。

かあさん ブドリが学校へ行くようになって、森もたいへんさびしくなりましたね。

とうさん それも昼までの話さ。ほら、わんぱく坊主が帰ってきた。

ブドリ ただいまー! ネリ、行こう!(木に名前を書く) 消し炭で、これはこならの木。

ネリ 赤い粘土で、これは、栗の木!

二人 杉、赤松、檜!(笑う)

ネリ これは白樺の木。お兄ちゃんこの木、ホップの蔦が絡まって、門みたい。

ブドリ (消し炭で白樺の木に書きながら) カッコウドリ、トオルベカラズ。

ネリ カッコウドリ、トオルベカラズ!

二人の笑い声が森にこだまする。

ブドリ　そして僕は十になり、ネリは七つになった。

ネリ　お兄ちゃん、今年はおぶしが咲かないね。

ブドリ　その年はお日さまが春から夏に白くて、いつもなら雪がとけるとまもなく咲く真っ白なおぶしの花も、まるで咲かなかった。

ネリ　おかあさん、曇（みぞれ）がぐしゃぐしゃ降ってる。

ブドリ　五月になっても曇が降って、七月の末になってもいつこうに暑さが来なかった。

かあさんが白い穂を持って蒼ざめてやってくる。

とうさん　だめかい。

かあさん　ええ、麦も粒の入らない白い穂ばかり。

とうさん　果物もたいてい花が咲くだけで、実が落ちちまってる。

ブドリ　秋になっても、栗は青いからのいがばかり。

父が外から帰ってくる。

かあさん どうでした、お父さん。

とうさん 野原はもうひどいさわぎだ。オリザも全滅だ。

ブドリ オリザというのは、僕らがみんなでふだんたべる、一番大切な穀物のことだ。

とうさん とにかく薪（たきぎ）を野原へ持っていこう。お前も手伝ってくれ。

かあさん ええ。

ブドリ とうさんとかあさんは冬になってからも、何べんも大きな木を町へそりで運んだ。

ブドリ どうだった？

両親 ……。(がっかりした顔。)

ブドリ 麦の粉、たったこれだけ……。

ブドリ それでもどうかその冬は過ぎて、次の春になった。

とうさん ブドリ、種を持ってきておくれ。

かあさん お父さん、あれは最後まで取っておくと決めた、たいせつな種ですよ。

とうさん もうあれしか残っていないんだ。やるんだよ、かあさん。(母さん祈る)

ブドリ けれどその年もまたすっかり前の年のとおりになった。

かあさん オリザが……、オリザが……！

ブドリ 秋になると、とうとうほんとうの饑饉《ききん》になってしまった。

ネリ おにいちゃん、学校行かないの？

ブドリ おやすみだって。もう学校へ来ることもが誰もいないんだ。

ネリ おとうちゃんとおかあちゃんは、お仕事しないの。

ブドリ おとうちゃんとおかあちゃんもおやすみなんだ。

ネリ じゃあみんなでいっぱい遊べるね。

両親は何かを相談すると、よろよろと部屋を出て行く。町の雑踏の音。

とうさん (どこかのドアをノックする) 食べるものがないのです。どうかおめぐみを。

かあさん (土下座する) おめぐみを。

二人はすこしばかりの黍《きび》の粒など持って帰ったり、なんにも持たずに顔いろを悪くして帰ってくる。

ブドリ 僕らはこならの実や、葛やわらびの根や、木の柔らかな皮やいろんなものを食べてその冬をすごした。

卓子を囲む家族。

とうさん ネリ、もういいのかい。

ネリ うん、もういらないよ。

かあさん ブドリは、おかわりはいらさないかい。

ブドリ かあさんこそ、全然食べてないじゃないか。

かあさん 私はみんなの後に食べるから大丈夫よ。

ブドリ ……。

ブドリ ネリは目にいっぱい涙を溜めて空腹を我慢していた。夜眠った後に、かあさんととうさんが僕らの頭を撫でるので、目がさめた。

両親 えらいね、ネリ。ごめんね、ブドリ。

ブドリ 春が来るころには、おとうさんもかあさんも、何かひどい病気のようにだった。

おとうさんが、じっと頭をかかえて、いつまでもいつまでも考えている。

ブドリ おとうさん、どうしたの。

とうさん ……。

ブドリ おとうさん？

父はにわかには起きあがって、

とうさん おれは森へ行つて遊んでくるぞ。

そう言つてよろよろ家を出て行く。

ブドリ 父さんは、まっくらになつても帰つて来なかつた。

ネリ お母ちゃん、おとうちゃん遅いね。

ブドリ お父さんどうしたろう。

おかあさんはだまって二人の顔を見ているばかり。

ブドリ 次の日の晩方のことだ、森はもう黒く見えた。母さんは炉に槽《ほだ》をたくさんくべた。

かあさん (おかあさんにはわかになつて) 家中すっかり明るくしましうね。わたしはおとうさんをさがしに行くから、お前たちはうちにいてあの戸棚《とだな》にある粉を二人ですこしずつたべなさい。

試し読みしていただけるのはここまでです。

この続きは商品をご購入の上ご覧下さい。

グスコープドリの伝記（おためしサンプル）
宮沢賢治×スチームパンク！

2013年12月25日 初版発行

著 者 田中円 © 2013年
発行者 石村寛之
発行所 有限会社レトロインク
〒181-0001 東京都三鷹市井の頭4-26-7
電話 0422-49-2903
